

なぜ学習者はオンライン授業で日本語の発音を学ぶのか
Why Do Learners Study Japanese Pronunciation through Online Class?

大戸雄太郎, 東京国際大学
Yutaro Odo, Tokyo International University

1. はじめに

日本語音声教育は、口頭コミュニケーションの重要な要素である「発音」に焦点を当て、学習者の発音能力・聴取能力に働きかける教育である。また、近年では、音声教育の目的として、学習者の自己実現に着目することが求められている（千 2017、大戸 2021a）。教師と学習者が即時的・相互的な音声のやり取りを行うために、音声教育は主に対面授業において行われてきた（小河原・河野 2009、赤木 2013、横溝 2014、松崎・河野 2018、大戸 2021b など）。一方で、全面オンラインでの音声教育の実践報告・研究は数が少なく、そのあり方が明らかになっているとは言い難い。

また、海外在住の日本語学習者は、日本国内在住の日本語学習者に比べて、日本語を用いた口頭コミュニケーションの機会が少ないと予想される。海外在住の日本語学習者は、何のためにオンライン授業で発音を学ぶのだろうか。また、オンライン授業の学習者に対して、教師はどのような音声教育ができるのだろうか。このような問いを明らかにすることで、オンライン音声教育の新たな目的が見えてくるのではないかと考えられる。

本研究は、日本の大学のオンライン授業で日本語を学ぶ、海外在住のゼロ初級学習者を対象とし、オンラインで Zoom を用いて行われた総合日本語授業をフィールドとする。研究目的は、学習者がなぜ日本語の発音を学ぶのかを明らかにし、オンラインでの音声教育のあり方を探ることである。

2. 研究方法

本研究の対象者が受講した授業は、2021年9月から12月にかけて筆者が担当した、Zoom 同時双方向型の初級日本語授業（180 時間）である。授業の受講者のうち、学期後半に宿題として課した録音課題を提出し、授業の出席率が 90% 以上であること、また、調査についての説明を理解し、同意を得た 11 名を調査協力者としている。調査協力者の情報（国籍と出席率）は、以下の表 1 のとおりである。

表 1 調査協力者の情報

番号	国籍	出席率	番号	国籍	出席率
S1	インドネシア	100%	S7	インドネシア	100%
S2	スリランカ	100%	S8	インドネシア	100%
S3	アメリカ	97%	S9	バングラデシュ	97%
S4	インドネシア	98%	S10	モンゴル	97%
S5	バングラデシュ	99%	S11	インドネシア	100%
S6	ベトナム	97%			

調査は授業期間直後に行い、1.学期中に行ったものとは異なる録音課題として、10件の短文の読み取りを各自で十分に練習したうえで録音するタスクを課し、2.発音学習に関するアンケートの記入とアンケートに関する半構造的インタビューを英語で行った。そして、インタビューの文字化資料を対象に、佐藤（2008）を参考にし、発音学習を観点にテキスト分析を行った。本発表では、分析結果のうち、学習者の発音学習目標が現れているコード・カテゴリーに着目した。

3. 研究結果

学習者の発音学習目標について、学生 11 名のインタビューの分析によって、91 件のコード、8 件のサブカテゴリー、4 件のカテゴリーを得た。カテゴリーと、サブカテゴリーの一覧は、次の表 2 のとおりである。

カテゴリー	サブカテゴリー
【音声能力の向上】	[誤解の回避]
	[母語話者の能力の獲得]
【日本語の活用】	[相互理解の進展]
	[機会の獲得]
【日本での生活】	[日常会話の円滑化]
	[日本での就職の希望]
【言語文化の理解】	[言語への興味]
	[アニメ・文化の理解の深化]

以下、順に、各カテゴリーについて説明する。なお、カテゴリーは【 】で表記し、カテゴリーに含まれるサブカテゴリーを [] で表記する。また、学習者の語りを引用する際、語りの末尾に発話番号を併記する。

3.1 【音声能力の向上】

【音声能力の向上】カテゴリーに含まれるサブカテゴリーとして、[誤解の回避]、[母語話者の能力の獲得] の二つが得られた。

まず、[誤解の回避] について、学習者は、日本語でのコミュニケーションを円滑にするために発音学習が重要だと捉えており、発音を誤ると誤解を招く可能性があると考えていることが分かった。以下の語りにあるように、S3 は、自分の発音で教師に誤解を与えてしまった例を挙げ、「理解しやすいコミュニケーション」には発音学習が重要だと捉えている。また、S11 は、アクセントによって意味の変わる表現を挙げ、発音に注意する必要性について述べている。

S3 : 私は先生に「かえで（楓）」と言いました。私が正しく言っていなかったので、先生はその時少し混乱していて、「かえで」の「で」に強調を置くべきだと言われました。これは理解しやすいコミュニケーションのため、発音を学ぶことの重要性を示す一つの例です。 (24)

S11 : はい、発音によって影響を与えられる可能性のある言葉がいくつかあるので、発音は非常に重要だと思います。たとえば、「切手」と「切

って」は、2つの異なる意味を持つ1つの表現です。ですから、日本語で話すときは（発音に）注意する必要があります。（4）

次に、[母語話者の能力の獲得]について、学習者は、日本語を日本人のように流暢な発音で話せるようになりたいと考えていることが分かった。以下の語りにあるように、S6は、「誰もが」母語話者と同じように流暢になりたいと思うはずだと述べている。また、S8は、自分の日本語にインドネシア語の癖があると捉えたうえで、日本語母語話者のように発音したいと述べている。

S6：新しい言語を学ぶときは、誰もが母語を話す人と同じくらい流暢になりたいと思っていますと思います。（82）

S8：つまり、日本語の単語や文章を言おうとするときは、いつもインドネシア語の発音の癖になっています。ですから、私は他の日本人が発音しようとしているときに、ただ他の日本人を真似ようとしています。たとえば、「あたたかくなかった」のような言葉を、日本語の発音の癖、日本語母語話者の言い方のように言いたくて、ちょっとは似せられると思います。（64）

このように、学習者は、音声能力を向上させることで、コミュニケーションにおける誤解を回避し、母語話者のような流暢さを獲得したいと捉えていることが分かった。

3.2 【日本語の活用】

【日本語の活用】カテゴリーに含まれるサブカテゴリーとして、[相互理解の進展]、[機会の獲得]の二つが得られた。

まず、[相互理解の進展]について、学習者は、日本語の親しみやすい発音を身に着けることで、日本人と良好な関係を築くことができると捉えており、相互理解を進展できると考えていることが分かった。以下の語りにあるように、S4は、相手の言語や話し方によって、相手を理解することができるかと述べている。また、S9は、日本語を流暢に話すことで、日本で他者との「強い絆」を築くことができると述べている。

S4：英語を使う人が「元気？元気そうだね！」というとき、それは「ああ、これが英語を話す人の話し方だ」と分かるようなものです。非常に興味深いと思います。前に言ったように、私たちは人々の言語と話し方を通して人々を理解することができます。（86）

S9：日本語が話せれば（日本での生活が）もっと楽になると思いますし、私と他の人との強い絆を築くことができると思います。ですから、日本語が堪能になればもっと親しみやすくなります。（18）

次に、[機会の獲得]について、学習者は、自身の夢や目標には日本語が必要であり、キャリアアップの機会として日本語を学んでいることが分かった。以下

の語りにあるように、S1 は、日本のアーティストのアートを理解するために、日本語を理解する必要があると述べている。また、S2 は、母国の日本企業での就職を希望し、日本語学習がキャリアアップの機会になると述べている。

S1 : デジタルペイントを作って日本のソーシャルメディアに投稿するデジタルアーティストとして生計を立てるのが夢です。また、日本のアーティストのアートもチェックしたいと思います。(中略) 彼らのアートの作り方を理解したいのなら、日本語を理解する必要があると思います。 (16)

S2 : 世界中に日本企業と日本のプロジェクトと娯楽があります。私の国にも日本のプロジェクトやものがあります。ですから、日本語を学べば、良いキャリアを積む絶好の機会になると思います。(82)

このように、学習者は、発音学習することによって、日本語をさらに活用したいと考えており、日本で他者との相互理解を進展させ、キャリアアップの機会を得たいと捉えていることが分かった。

3.3 【日本での生活】

【日本での生活】 カテゴリーに含まれるサブカテゴリーとして、[日常会話の円滑化]、[日本での就職の希望] の二つが得られた。

まず、[日常会話の円滑化] について、学習者は、日本語を話して円滑に自己表現することで、日本での日常生活を快適に送れると捉えていることが分かった。以下の語りにあるように、S5 は、日本人のような発音を身に着ければ、日本社会にもっと馴染むことができると語っている。S6 は、スムーズに話すことが、聞き手を苛立たせることを防ぐために重要であると語っている。

S5 : 日本人が日本語を話すように調音やアクセントがあれば、いろんなところに行くときに、環境に溶け込んだり、もっと馴染んだりできるようになります。もっと 社会に馴染んでいるような気がします。 (2)

S6 : できるだけスムーズに話したくて、それでみんなすぐに理解できるので、他の人が待つ必要も、イライラする必要もありません。 スムーズに話したら時間の節約にもなります。スムーズに話す方がいいというのは、IELTS のテストでも流暢さがポイントになっていることからそう、スムーズに話すのが当然じゃないですか? (78)

次に、[日本での就職の希望] について、学習者は、日本のビジネスシーンで他者と交流するために、高度な日本語能力が必要であると捉えていることが分かった。以下の語りにあるように、S3 は、日本語を流暢に話すことで、自分の選択肢を増やし、仕事の候補者になることができると語っている。S9 は、日本語が堪能でなければ日本企業に就職できないと語っている。

- S3：日本語が（流暢に）話せる人は、日本でもっと多くの仕事ができると
 思います。一方、日本語が（流暢に）話せない場合は、選択肢が限ら
 れている可能性があり、私がしていない経験をしたことがある人が優
 先されます。ですから、日本語を学ぶことは、私が仕事の最高の候補
 者の一人になるための最も良い選択肢でした。（6）
- S9：そして卒業後の私の計画は日本企業の下で働くことです。先輩、友達、
 Google から知る限り、日本語を学ぶことは私にとって不可欠です。日
 本企業への就職を希望する場合は、少なくとも日本語に堪能である必
 要があるか、少なくとも JLPT の N3 または N2 を持っている必要があ
 って、それは日本での就職に必須です。（4）

このように、学習者は、発音学習によって、日本語を円滑かつ堪能に用いるこ
 とができるようになり、他者との日常会話を円滑化し、日本で就職する際の選択
 肢を拡大することができるかと捉えていることが分かった。

3.4 【言語文化の理解】

【言語文化の理解】 カテゴリーに含まれるサブカテゴリーとして、[言語への
 興味]、[アニメ・文化の理解の深化] の二つが得られた。

まず、[言語への興味] について、言語自体を学ぶのが好きで、言語の持つ独
 自の魅力に迫りたいと捉えている学習者が見られた。以下の語りにあるように、
 S6 は、言語には独自の魅力があると語っている。S8 は、英語以外の言語で話せ
 るようになりたかったために日本語を勉強していると語っており、言語自体への
 興味が窺える。

- S6：すべての言語には独自の美しさがあると思います。正しい言い方はわか
 りませんが、私が言ったように、私は言語自体、すべての国、言語
 には独自の魅力があると感じています。（98）
- S8：私はいつも英語以外の言語で話せるようになりたいとっていました。
 ですから、日本語で話すのはとても面白いです。（38）

次に、[アニメ・文化の理解の深化] について、学習者は、日本のアニメや文
 化が日本語学習のきっかけになっており、翻訳された言語ではなく、日本語のま
 ま理解したいと捉えていることが分かった。以下の語りにあるように、S6 は、
 日本にある伝統文化を挙げ、日本語以外の言語では説明することができないと語
 っている。また、S10 は、日本のアニメを見る中で、キャラクターの特徴的な語
 尾を知り、日本語学習への好奇心となったと語っている。

- S6：私は英語がわかるとしても、それでも新しい言語を学べば、多くの方
 法で助けられます。また、たくさんの伝統や文化、そして本当に
 「日本の」ものがあり、そのような（日本語以外の）言葉を使って説
 明することはできません。それを知るためには、日本語を学ぶことが
 最もいい方法です。（98）

S10：その（日本語を話したくなった）理由は、アニメのキャラクターが特定の単語を共有しているためです。たとえば、〇〇（あるキャラクター名）を知っているなら、ほとんどの場合、彼は文の直後に「〇〇〇（特徴的な語尾）」と言います。そして、これが私の日本語学習への好奇心につながりました。（2）

このように、学習者の発音学習を含む日本語学習のきっかけとして、言語文化そのものをもっと理解したいという考えがあり、学習者が、日本語独自の魅力を学び、アニメや文化の理解を深めたいと捉えていることが分かった。

4. 結論

日本への留学を控えた海外在住学習者の発音学習目標には、日本での日本語使用を見据えた目標が多く見られた。学習者は、3.1に述べたように、音声能力の向上は、コミュニケーションにおける誤解の回避に繋がると捉えていた。また、日本語を流暢に話せるようになることで、3.2に述べたように、日本で他者との相互理解を進展させ、3.3に述べたように、日本での他者との日常会話を円滑化し、日本で就職する際の選択肢を拡大できると捉えていた。

一方で、発音学習目標には、日本での日本語使用に留まらない目標も見られた。学習者は、3.1に述べたように、母語話者のような流暢さを獲得することを言語学習の目標として設定していた。また、3.2に述べたように、流暢に話せるようになることが、母国の日本企業などでのキャリアアップの機会になると捉えていた。そして、3.4に述べたように、学習者の日本語学習のきっかけが、言語文化そのものを理解するものであるという考えがあることが分かった。

学習者の発音学習目標から、オンライン音声教育の目的として、以下の3点を示唆することが可能である。

1. 従来の音声教育で目指されているように、日本語のコミュニケーションを支える音声能力を向上させることで、学習者の意図伝達を円滑化すること。
2. 親しみやすい発音を身に着けることで、学習者の日本語を活用した自己実現を支援すること。
3. 日本語メディアを理解するための聴取能力を向上させることで、学習者の日本語学習のきっかけにもなっている言語文化への理解の深化を目指すこと。

以上3点の音声教育の目的を踏まえることで、日本国内・海外と学びの場所を制限されないオンライン音声教育を行うことが可能である。

本研究では、日本留学を控えた海外在住学習者のオンライン発音学習に着目し、オンライン音声教育のあり方を探ることができた。一方で、オンライン音声教育を充実させるためには、その具体的な内容や方法について議論を深める必要がある。また、学習者が学ぶ時・場所の双方を制限されず効果的な発音学習を行うために、音声教育を受けた学習者の自律学習に着目し、その内実を明らかにすることを今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、「自律学習への足場かけを目指す日本語発音指導の実証的研究」JSPS 科研費 JP21K19990 研究活動スタート支援（代表者：大戸雄太郎）の助成を受けたものである。

参考文献

- 赤木浩文（2013）「気づきを促す日本語の発音指導」『外国語教育研究』16, 37-54
- 大戸雄太郎（2021a）「CEFR がもたらす日本語教育の新たな意味」『早稲田日本語教育学』31, 97-115
- 大戸雄太郎（2021b）「日本語の発音に特化した授業における学習者の学び—初中級のフランス語母語話者を事例として—」『Journal CAJLE』222, 137-162
- 小河原義朗・河野俊之（2009）『日本語教師のための音声教育を考える本』アルク
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社
- 千仙永（2017）「日本語音声教育の変遷・課題・展望—日本国内における教師教育に着目して—」『早稲田日本語教育学』22, 41-60
- 松崎寛・河野俊之（2018）『日本語教育 よくわかる音声』アルク
- 横溝紳一郎（2014）「優れた教師からの学びを、自分自身の実践にどう活かすのか—上級学習者への発音指導で、授業と家庭学習のつながりを求めて—」『言語教育実践イマ×ココ—現場の実践を記す・実践を伝える・実践から学ぶ』2, 96-106 ココ出版